

## 伝統技術を継承し「理念経営」実践

### 日東亜鉛、溶融亜鉛めっきで国内屈指

創業から約100年。国内屈指の生産規模を誇る「溶融亜鉛めっき」の専門メーカーが川崎市にある。日東亜鉛(川崎市水江町、☎044・266・7881)は、あらゆる鉄鋼製品を腐食・さびから守るための溶融亜鉛めっきで、生産量は月6000ト、国内では唯一、大・中・小の三つの生産ライン(釜)を擁している。伝統技術を継承しながらも、時代にマッチした業容に変化することで長寿企業としての地位を築く。それを支えるのは、技術だけではなく、独自の「人事理念」を柱とした理念経営の実践もある。

#### インフラ支える存在

前身は東京・月島で1924(大正13)年に創業された「小幡亜鉛鍍金」にさかのぼる。59(昭和34)年に「日東亜鉛鍍金」として川崎に設立。以来、現在の社名に変えながら、溶融亜鉛めっきの技術を脈々と受け継ぐ。

溶融亜鉛めっきとは、鉄鋼製品を亜鉛皮膜で覆い、外部環境から保護する技術。鋼管やインフラに使われる建築資材、建物の鉄骨、身近なものでは標識の柱やガードレール、高速道路の遮

音壁…。数え上げるとキリがないほど生活インフラに欠かせない存在だ。国立競技場や横浜ベイブリッジ、東京スカイツリーでも、同社の技術が用いられている。

会社設立当時は、水道整備の進展とともに、配管めっきを中心に手掛けていた。しかし、時代とともに建設資材にも販路を拡大。今ではそれが主力事業になっている。「都心の再開発や、地方での半導体関連工場の建設も追い風になっています」と、本野晃司社長は堅調な需要の伸びを実感している。

#### 「人事理念」で職場が変化

同社の強みとしては、技術や生産規模の大きさはもとより、理念経営の実践が挙げられる。

16年前に経営をパタンタッチした本野社長が進めたのが社内改革だった。長年にわたって同じ事業を手掛けていると、何もかもがルーティン化してしまう。職人気質、過酷な労働環境による高い離職率…。当時の同社も「キツイ」「汚い」「危険」の三つが色濃かったという。

本野社長がこれらを打破するために着手したのが「人事理念」の策定。社員にとっての行動指針・クレドでもあり、会社が考える「人材のあるべき姿」を示したものだ。「(人事理念を)実践することで、社員が人として成長し、幸せになることも目指しています」。

具体的には①自律(自ら目標を掲げ、自ら考え、自ら判断し、自ら行動できる)②創造(問題意識を持ち、常に改善・改革を実行できる)③信頼(常に素直で謙虚、お互いを信頼し合い、仕事に誇りと責任を持てる)の三つ。誰でも覚えられ、実践できるような極めてシンプルにしたという。



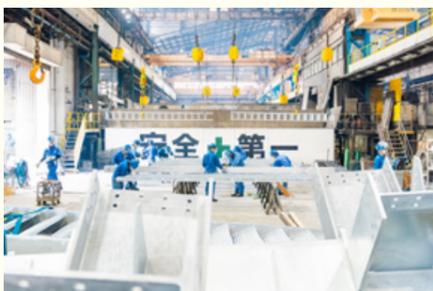
#### 「新3K」目指す

とはいえ、その理念がすぐに浸透するわけではない。それは、辛抱強く、時間との戦いでもあったという。「とにかく(人事理念を)ひたすら言い続けるしかありません。続けていけば、どこかの瞬間で自走するようになります。(浸透まで)4～5年かかりました」と明かす。今では、現場の若い社員が働きがいを持つようになり、定着率は飛躍的に高まった。

同社の場合、たとえ退職したとしても「出戻り」を認めている。「人は完璧ではないですし、迷うのは当たり前で

す。一度辞めて転職し、そこで当社のように気付いたら、また戻ってきてくれるよと思っています。以前よりも働いてくれます」と説明する。実際、社内では10人以上が出戻りを経験しているという。

現在、提唱するのが“新3K”だ。工場は「きれい」で働きやすく、働く姿が「格好よく」、しっかり「稼げる」という意味だ。これらを目指すことで人が集まり、人は「人事理念」をベースに成長し、そして会社も発展する。理念経営を着実に実践することで、長寿企業の道を歩み続けている。



## 大電流対応、ブスパー事業を強化

### 成光工業、コンパウンドやITなど新規分野も次々

成光工業(川崎市川崎区浅野町、☎044・366・5855)は、金属板製の配線「ブスパー」の難加工対応に実績があり、専門のネット販売サイト「ブスパー通販.com」も運営する。現在、電気自動車(EV)など大容量電流向け需要の拡大に対応中だ。同社の強みは、ブスパーや端子台などの金属加工事業を中心に、コンパウンド事業やIT事業など新規事業を次々に立ち上げていること。1967年の創業から、時代と経済環境の変化に合わせて事業内容を自在に変化してきている。

#### 少量から量産まで

ブスパーは金属の板を加工して配線に使うもので「導体棒」とも呼ばれる。

導電性の高い銅製が多く、大電流を流す配電盤や産業機器、変電所設備などで使われている。同社では細長い板を縦に曲げるだけでなく、水平方向に

横へ曲げる「エッジワイズ曲げ」の技術を持ち、装置のレイアウトに合わせて複雑な曲線形状のブスパーを短納期で加工できる。

2013年のブスパー事業開始と同時にネット通販の専用サイトも開設。特注の一点ものから量産まで短納期対応している。

電気自動車は動力源として大容量の電流を扱い、ブスパーが大量に必要だ。量産時はプレス金型での加工となるが、同社では量産前にブスパー試作の需要があるとみている。すでに引き合いもあり、対応を強化していく。

#### CNF分野にも進出

同社は家電向けの小型ばね製造を中心に創業し、黎明期の携帯オーディオ向けの部品の大量生産を担当していた。80年代の家電製品の海外生産シフトを受け、精密プレス金型による端子

台やねじ端子事業を展開してきた。ブスパー事業は、精密プレスで蓄積した金属の曲げ加工技術を応用して参入している。

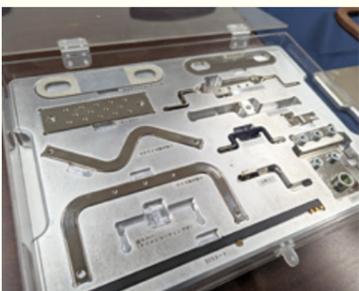
2018年には注目を集めた新素材「セルロースナノファイバー(CNF)」の応用研究を始め、20年にスキー・スノーボード向けワックス販売などのコンパウンド事業を開始した。

現在は、独自の在庫・生産管理システムを開発するIT事業にも着手し、数年後の外販開始を目指している。

同社の松尾教弘社長は、「リーマンショック時に売上高が8割減となり、単



なる下請けでなく設計に近い上流工程を担当する必要性を痛感し、新規分野の拡大に取り組んできました」と話している。



# ママ社員提案「見守りシステム」

## アルファメディア、ICTで保育現場をサポート

子どもの置き去り事故が続く中、保育業界では対策が急務となっている。しかし、人手不足による保育士への負担増も大きい。そうした中、教育事業に20年以上携わるシステム開発企業、アルファメディア(川崎市中原区小杉町、☎044-712-7481)では、子育て経験がある女性社員たちが立ち上がり、子ども見守りシステムを開発した。使命感を胸に社長に企画・提案し、わずか3週間で完成したという。

### 一人にしないから

「かいけつシリーズ『見守り(MM-AP01)』一ぜったい一人にしないから」と名付けた同システムは、公園などでの園外活動での使用を想定する。

園児たちに「発信機」となる専用タグを、腕や専用ポケットのあるビブスに装着してもらう。保育士から一定距離

離れたら、専用アプリの入ったスマートフォンやタブレットが振動、アラートを鳴らす仕組みだ。併せて、どの園児が遠くに離れてしまっているかが画面上で表示される機能もある。

昨夏、猛暑の厳しい日に通園バスで園児の置き去り事故が起こった。それがきっかけで、保育施設の管理体制が問われ、法整備が強化された。

通常、園外活動時には、置き去りや行方不明を防ぐため、保育士たちが「目視」というアナログな手法で人数確認を徹底している。だが、相手は活発な園児たち。予測不能の行動は日常茶飯事。目視にも限界がある。

同社では、一連の置き去り事故を受け、子どもを持つママ社員たちが立ち上がり「こうした事故が二度と起こらないようにしたい」と、見守りシステムを企画。小湊宏之社長もすぐにゴーサインを出した。

### 社内外で協力

もともとは学校向けの出席管理システムなどを手掛ける企業。保育現場向けにも、大型モニターに児童の在園状況が一覧表示され、職員同士が情報共有できるシステムも製品化している。

今回の見守りシステムは、こうしたノウハウを組み合わせ、保育現場のニーズを踏まえて応用したことで短期間で開発できたという。

特徴あるネーミングや説明動画の制



作は、若い保育士たちと同世代の社員の娘たちが、製品チカラは20代の若手社員が担当した。社内外を問わず、子どもたちの命を守るシステムを普及させたい気持ちで、全員が一致団結した。

導入費用は、専用システム1ライセンスとタグ(発信機)30個、格納ポケット付きのビブス30枚のセットで約28万

円。できるだけ多くの施設で使ってもらいたいため、価格を抑えたという。ランニングコストも電池交換費用のみ。

開発を担当した金丸和歌子さんと本所裕美さんは「ICTの力で、子どもを預ける親にも、小さな命を預かる保育士にも、安心感を持ってもらえたら」と語り、普及に意欲を燃やしている。



# バイク用インカム、産業用にも

## サイン・ハウス、小型・低価格で安全管理

サイン・ハウス(川崎市中原区中丸子、☎044-982-3788)は、オートバイ用の無線インカムを産業用に拡販する。Bluetooth方式を採用し、従来のトランシーバーなどに比べ小型・低価格なうえバイクツーリング用に高い防水性を備えることから、高速道路工事の保安スタッフといった騒音の中で安全管理のための情報共有が必要な分野を中心に市場を開拓する。3年後にインカム売上高のうち産業用途の比率を3割までに引き上げる方針だ。



### 市場シェアは過半数

同社はオートバイ用品の専門商社として1987年に創業した。2006年から自社ブランド製品を開発。無線インカムは08年に「B+COM(ビーコム)シリーズ」として発売し、ヘルメットに取り付けて仲間と会話しながら走行する使い方を普及させてきた。

現在、年間出荷台数は約8万台まで成長。競合製品も多数登場しているが「市場シェアは過半数を押さえています」(新井敬史社長)という。

ビーコムシリーズは、パソコンの周辺機器接続などに使うBluetooth方式の2.4GHz帯無線通信により、最大6台までの同時通話が可能だ。通信距離はクラス1、周囲の状況で変化するが、数百メートルを超えることもあるという。

音の劣化や遅れがほとんどなく、ノイズキャンセルなどにより、周囲の雑音も気にならない会話性能を持っている。ヘルメットに本体とマイクを装着しフリ

ーハンドで通話、1回の充電でモデルにより連続12~22時間使える。価格は1台2万~4万円程度。

### 高速道路や林業にも

高速道路工事では、工事の状況や高速走行する一般車両を常に監視する保安スタッフがプライベートでビーコムを利用。声を掛け合って安全を確保する効果が認められ採用につながった。

同社はこのほかにも林業の伐採スタッフや音の大きい工場内の作業員な



ど需要は大きいとみており、それぞれの分野に強い代理店と共同で市場を開拓していく。

# かわしん 経営サポート

創業、販路拡大、知的財産活用、SDGs、事業承継・M&A、その他

経営相談に関するお問合せは、

川崎信用金庫 お客さまサポート部  0120-502-456

【受付時間】平日9:00~17:00  
(土・日・祝日・12月31日~1月3日を除きます)

- ご相談は営業区域の方に限ります。相談内容によっては、ご希望に添えない場合もございます。あらかじめご了承ください。
- ご相談は無料で承りますが、相談内容によって、一部有料となる場合があります。



KAWASHIN  
100th Anniversary



経営に役立つ情報をメールマガジンにて配信中です



ご登録はこちらから